

魔王の娘の異世界召喚記

ダルエスサラーム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神殺しの魔王の娘、ミュウが黒の召喚士の世界に勇者として召喚された。

彼女はこの世界でどんな経験を得て、出会いをし、そして、どんなバグキャラになるのであろうか！

ミュウが活躍する小説が読みたくて書いた。
転移ものつてタグがなくて困る。

あ、更新は不定期です。

目

次

プロローグ

神皇国デラミス

12 1

プロローグ

目の前を覆う闇が薄つすらと消えてくると、ぼんやりした感覚が一気に覚醒した。そこは見渡す限り何もない、無限に広がる白い空間だつた。ここは本当に現実だろうか。夢なのではないだろうか。そんなふうに思えるような空間だつた。

周りを見ると、自分たち以外に人の姿は一人しか見えない。いや、果たしてそこにいたのは人ではなかつた。蒼白い髪をなびかせ、うつすらと微笑んでいるその背中には、どういうわけか純白の翼が生えていた。明らかにおかしいその翼はしかしながら自然に動いており、彼女にマッチしていた。

その女性はおもむろに口を開いて、

「ようこそ！この剣と魔法が飛び交う世界に！勇者たちよ。魔王を倒し、この世界を救つてください。」

そんな、おおよそ現実とは思えないようなことを告げてきた。あまりに突然なことに、勇者と呼ばれた者たちの誰もが固まる中、一人だけ目を輝かせていた少女の放つた言葉は、

「異世界に、来ちゃつたの!!!」

という、ごくごくありふれたものであつた。

エメラルドブロンドの髪をゆるふわに巻いた、澄んだ翡翠の瞳の10歳くらいの美少女——南雲ミユウは、その装いを制服にして、廊下を友人と歩いていた。

友人と言つても、横に並んで談笑している人はどう見てもミユウよりも年上で、高校生くらいのよう見える。

彼女の名前は志賀刹那。長い艶のある黒髪を後ろで一つに束ねている彼女は、この学校の生徒会長にして成績は学年トップ。県道の腕もピカイチで全国大会にも出場するほどで、まさに品行方正文武両道を地で行く少女である。

なぜそんな二人が並んで歩いているのかと言えば、この学校は世にも珍しい小中高一貫の私立高校で、現在放課後真っ只中だからであ

る。

ミュウはその類稀なるコミュニケーション能力から、この学校随一の美人である刹那とも親交を深めているのである。

無論、ミュウも学校随一の美人であるのだが。

今は下校する直前で、刹那が教室に忘れ物をしたので取りに行くのを、一緒に帰ろうとしていたミュウもお話をてらついて行つているところだつた。

「それでお友達とパーティーを楽しんでたんだけど、料理に睡眠薬でも入つてたのか、急にみんな倒れちゃつて、子供だけ誘拐されたの。」「えつ？ 誘拐？」

刹那はミュウが先週末に行つたというパーティーの話を聞いていたが、雲行きが怪しくなつてきた。

「そうなの。ミュウは睡眠薬を気合で無効化したんだけど、危なそ
うだから一緒に誘拐されたら知らない港の倉庫にいたの。」

「気合で乗り切つたのかー。すごいね。」

「そこから誘拐した人たちを自力でどうにかしたら、なんと誘拐犯はテロリストだつたの！」

「おそろしいね。」

「だから急いでパパに連絡したら、『パパに何をしてほしいんだ？』つて言うから、助けてつて言つたら、テロリストを壊滅させたの！ パパ
かつこよすぎるの!!!」

興奮して話していたミュウだが、最後の一言を発するときだけ妙に艶っぽい声を出していた。

「ミュウちゃんのパパはすごいんだねえ…」

刹那は感心したように相槌を打つてゐるが、まさか信じてゐるわけではない。10歳くらいならそういうおままでともするかもしれない納得しているし、最後の言葉だけ明らかに艶やかな声であつたような気もするけど氣のせいだと思つてゐる。

いくら先週末に実際に世界規模でテロがあつて、それをワルキュー
レやらGOZIRAやら魔王が解決したとニュースになつていたとしても、いつもミュウが父親の話をするときに女の顔をしている気が

していたとしても、ミュウとその父親の血がつながっていない義理の親子だとしても、信じていなければならぬのである。

実際はミュウは事実を言つていいだけなのだ。

そんなふうに話していると、目的の教室の前にたどり着いた。中からは聞き慣れた話し声が聞こえてくる。

教室に入ると、そこには剣那の友人三人がいた。

「おっ、剣那か。どうしたんだ？」

「忘れ物でもした？」

声をかけてきたのは順に、神崎刀哉と、水丘奈々だ。

刀哉はアイドル並の容姿で、剣那ほどとはいかないものの成績優秀でスポーツもできて、更に誰にでも優しいためどこに行つても人気者だ。正義感が強く、今まで挫折を知らないため、人を信じすぎるという危うい一面も持つ。剣那とは幼馴染でもあり、暴走する刀哉を剣那が諫めるということがある。

奈々は背が低く幼い顔立ちをしているが、対象的に胸は大きく、一部の男子から異様なほどの人気を誇っている。剣那と刀哉と同じクラスの生徒だ。

「そんな感じよ。」

「ん、志賀さんが忘れ物とは珍しい。」

「そんなこと言つて、黒宮さんは転校してきたばかりでしょ。」

「でもなんとなく想像はつく。」

続いて剣那に返答したのは、同じクラスの黒宮雅だ。彼女はなんと前日にこの学校に転校してきたばかりの、日本とロシアのクオーターで、天才的頭脳を持つ綺麗な銀髪の不思議系美少女だ。その容姿から、転校初日にファンクラブができたという偉業を達成した。

どうやらクラスにはこの三人しか残つていないようだ。

剣那は、転校してきたばかりの雅がクラスメイトと話をしていたようでも安心していた。

「でも、黒宮さんがクラスに馴染めてるようで良かつたわ。」

「問題ない。生徒会長様は心配性。」

「でも話してる相手が刀哉だから心配もするわよ。」

「ああ…女子相手の神崎君は酷いからね…」

「?なんのことと言つてるの?」

女三人集まれば姦しいと言うように、女子が集まると話が弾むようだ。それが出会つて間もない友人だとしても。

だがここにはもう一人女子がいる。

「そりいえば志賀さん、子連れ?」

刹那はそう言われて、なんのことかしらん?と思つたが、雅は転校してきたばかりだからミュウのことを知らないかもしれないと納得する。

「ああ、この子はミュウちゃん。私の友達よ。」

「南雲ミュウなの。ミュウって呼んでほしいの。よろしくなの。」

「ん。私は黒宮雅。呼び方は何でもいい。」

「じゃあみつちゃんって呼ぶの!」

やはりミュウのコミュニケーション能力は素晴らしいようだ。不思議系美少女ともすぐに打ち解けられる。

そのまま少し話していると、学校のチャイムがなつた。

一般生徒下校の時間だ。刹那は生徒会長だからこの時間では帰らない日もあるが、今日は特にやることもないのに帰ることにした。ミュウと帰るとも言つていたし。

「時間も時間だし、私達は帰るわね。」

「もうこんな時間か。俺も帰るかな。」

「私も帰る。」

「じゃあ私も帰りますね。」

「じゃあみんなで帰るの!」

結局全員帰るようだ。

それじゃあ、と、それぞれが帰る準備を始めようとすると、

突然、地面が光を放ち始めた。

「な、なんだこれは!?」

「どうなつてるの!?」

あまりに突然のことに対する動搖する刀哉達だが、一人だけ状況を把握できている者がいた。

ミュウだ。

（これは…魔法陣？と/orあえず悪意は感じないみたいだけど……うーん、パパかティオお姉ちゃんあたりに聞かないとい、どんな効果かわからぬの）

冷静と言つても、打てる手はないのだが。

「とりあえず皆！部屋から出て！」

そう刹那が促すが、時既に遅し。

五人がこの場を離れる前に魔法陣が一際強く光を放つと、視界が光に包まれて、五人はゆっくりと意識を光の中に手放していった。

そして話は冒頭に戻る。

異世界に来た。

ミュウがそういうことをことで、刀哉たちは漸く現在置かれている状況を考え始めた。

とは言うものの、現状何もわかつていらない。わかつてているのは少なぐとも今いる場所は教室ではないということくらいだ。

「いきなりのことで混乱しているかもしませんが、まずは私の話を聞いてください。」

翼の生えた女性は諭すようにミュウ達に話しかけてきたが、刀哉たち4人は混乱しているため頷くことしか出来ず、ミュウも状況把握のために話を聞くことにし、頷いた。

「ありがとうございます。早速お話を聞いていきたいと思うのですが、その前に自己紹介をしておきましょうか。」

私はメルフイーナ。この世界の転生を司る神をしています。」

「そう言つて、恭しく一礼をしてきた。

「か、神崎刀哉です。」

「志賀刹那です。」

「水丘奈々です。」

「黒宮雅。」

「南雲ミユウなの。よろしくなの。」

続いてミユウ達も簡単に自己紹介した。

「ありがとうございます。皆さん良いお名前ですね。では、早速現状の説明と、今後についてお話していきたいと思います。」

まず、今いる場所はあなた達がいた世界とこちらの世界の狭間です。ここでは時間はほとんど流れませんのでご安心ください。

あなた方をこちらに呼び寄せた理由は最初に申し上げた通り、私達の世界を救つてほしいからです。具体的には、魔王と呼ばれる存在を倒して欲しいのです。魔王を放つておくとあらゆる悪辣で非道な行いを繰り返し、世界が滅びてしまうのです。どうか、あなた方のお力を貸してくださいませんか？」

メルフィーナが話した内容は、所謂神様転生、いや転移と呼ばれるもののようにあった。また、話す様子から、心底この世界のことを思つており、言つていることが真実であることは刀哉達にしっかりと伝わってきた。

「ええ！俺の力で世界を救えるのなら、ぜひお受けします！」
「ちよつと待て！」

すぐさま引き受けようとした刀哉を、刹那が諫める。実はこれは日常でよくあることで、刀哉は人を信じすぎるくらいがあり、刹那がストップとして働いているのである。

「せめてもう少し話を聞いてからにして！女神様、いくつか質問をしてもよろしいですか？」

刹那がそう尋ねる。

「ええ。構いません。」

「ではまず、なぜ私達が呼び出されたのですか？そもそも魔王とやらもそちらの世界で対応できるのではないのですか？」

刹那の疑問は最もなものだ。なぜ自分たちが、という疑問はどんな時にでも起ころるし、特に今回のような場合ならばそう聞かずにはいら

れない。また、呼び出される必要があるのかというのも、必然疑問として浮かび上がってくる。

「まず前提として、魔王は異世界人にしか倒せません。そういうふた能力を持つていてるからです。そしてあなた方を呼び寄せた理由は、あなた方が勇者としてふさわしいと我々が判断したからです。」

メルフィーナの返答も尤もらしいものだ。魔王が異世界人にしか倒せないなら召喚も納得するしかない。

「じゃあ私からも。そつちの世界から帰ることはできるの？」

雅も疑問に思つたことをメルフィーナに問う。これも聞いておかなくてはならないものだ。

「魔王を倒していただければ、帰ることができます。」

この返答は予想されていたものであろう。魔王を倒すために呼び出したのにその前に帰られては、メルフィーナも、この世界も困ることこの上ない。

「あ、私からも。そもそも私達に魔王を倒すことなんてできるんですか？」

奈々も続けて聞く。

「倒せます。いえ、倒してもらわなくてはいけません。あなた方には魔王と戦えるための力を授けますが、それだけでは足りません。モンスターなどと戦つて経験を得て、強くなつていただきます。そして最終的に魔王を倒していただきます。」

メルフィーナが答えたのは、異世界モノでよくあるようなものであつた。

これは暗に危険があると言つているようなものではあるが、倒さなくてはならないという強い意志を感じさせるものであつた。

「質問はもういいですか？皆様のお答えをお聞きしたいのですが。」

「待つの。大事なことを聞いていないの。」

ミュウの静止に刹那はなにかしらん？と思う。と言うのも、刀哉は元から世界を救おうとするだろうし、自身も刀哉についていこうと思つてゐるし、もう聞くべきことは無いのでは？と思つていたからだ。

「一体何でしようか?」

「期間。一体世界を救うのに何年かかるの?それと、そつちの世界とミュウたちの世界での時間の進みの速さの違いも聞きたいの。」

確かに大事なことだつた。刀哉たちは高校生で、ミュウなんてまだ10歳の子どもだ。これでとても長い期間、例えば何十年とかかると言われては、世界を救うなんてすぐに結論を出すことなどできない。「……1年以上はかかると思います。尤も、前後は大きくあると思いませんが。それとあなた方の世界とこちらの世界の時間の流れは一致しています。ですので、こちらで1年間過ごせばもとの世界でも1年間が経過しています。ですが、あなた方が居なくなつていた期間は留学などに行つていたというふうに記録と記憶が書き換えられますので、問題ありません。」

魔王を倒すのだ。やはりそれなりに長い期間かかるのは仕方がないことと言えよう。それに、時間軸の一致は仕方がないものであるので、どうしようもなかろう。だが、いなくなつている間の記憶の辻褄合わせが行われるのは安心とミュウ以外の四人には思われた。

「では…皆様の結論をお聞かせ願います。」

そう言われるが、刹那達の顔は重い物となつていた。それはそうだろう。1年以上もかかり、更に危険があることだ。迷うのも無理はない。

そんな中、刀哉は決意を固めた目をしていた。

「やります。誰かがやらなきやいけないことなんだ。だから、他でもない俺がやりたいと思う。」

刀哉の答えは『Y e s』だつた。正義感溢れる彼はこんな依頼は願つてもいいものだつたのであろう。

そしてそれを見た刹那も覚悟を決めた。

「私もやります。確かに大変なことなんでしょうけど、こいつを放つておくことなんてできませんし。」

刹那は世話を焼き気質なのであろう。刀哉を放つておけないようだ。

次に意見を固めたのは奈々だ。

「私は…いえ、私もやります。神崎君じゃないけど、誰かがやらなきゃいけないことなのは事実ですし、それなら他の人じやなくて自分でやつた方が誇れるかなって。」

奈々も世界を救う決意をしたようだ。

そして、

「……私も。面白そうだしやる。」

雅は少し軽いが、考えてから決めたようだ。こう見えてよく考へているいい子です。

そして残るはミュウだけだが、未だ考へるようにしている。

他の四人と違つてまだ10歳の子どもだ。普通なら保護者が守つてあげないといけないぐらいの子どもであるのだ。迷うのも必然である。

しかしミュウが迷つているのは世界を救うか救わないかではなかつた。

「ミュウが世界を救うのに参加するのに、条件が2つあるの。」「ほう。それは何でしようか？」

「1つ目、魔法を使えるようにすること。2つ目、パパにこれからミュウが書く手紙を渡すこと。この2つができるならミュウもやるの。」

ミュウが提示した条件は、メルフィーナにとつてさして難しいことでは無かつたが、どうしてミュウがあんなに悩んでいたかは察することができないようなものであつた。

「その程度のことでしたら出来ます。ですが、前者はともかく後者は、先程も言いましたが魔王討伐を達成して頂ければ、あなた方がこちらの世界にいた期間の記憶の補填は行われますので、あまり意味はないかと思われますよ?」

「問題ないの。1つ目は個人的なお願ひだし、2つ目の方はそれだけやればパパも表立つて迎えに来ないとと思うからつて理由だから。ミュウたちがいない間もあつちの世界では時間が止まつてゐるわけ

じゃないでしょ？」

ミュウ以外はは迎えに来るという言葉に首を傾げたが、ミュウにとつては愛しのパパたちが迎えに来ないかということが問題だつた。ミュウの父、南雲ハジメは所謂バグキヤラだ。世界最強で家族のこととなると容赦をしない。特にミュウの事となれば、電話一本で世界最大のテロリストの組織を壊滅させるほどである。

そんなハジメに、ミュウがどこか違う世界に行つたことがバレれば、少なくともミュウを連れ出した者は消されること間違いないしだ。

そう。ミュウが悩んでいたのは、『世界を救う旅に参加するかどうか』ではなく、『どうやつたらその旅に参加できるか』だつたのだ。「わかりました…再三問いますが、本当に魔王を倒す協力をしてくださいのですね？」

「やるの。世界を救うくらいやらないと、パパのお嫁さんなんて役者不足も甚だしいから。」

そう。ミュウが世界を救うことを決めた理由がこれだ。

ミュウの父は神殺しの魔王である。そんな父と結婚するに能う存在になるには世界を救うくらいやらないといけないと考えたのだ。実際はそんなことをしなくとも、ハジメにとつてミュウは強い存在なのだが。

他の4人もそれ何かを決意したような顔で頷いた。

「皆様のお答えはわかりました。では最後にこれをお渡ししておきます。」

そう言いながらメルフィーナが刀哉の方に差し出してきたのは一振りの直剣だ。

純白の鞘に収められたその剣は、抜かれてもいらないのに強い聖なるオーラを放つているように感じられた。

「これは…？」

「これは聖剣ウイル。歴代の勇者様方にお貸ししている剣です。この剣は勇者の証でもあり、あなた方の助けとなるでしょう。」

「聖剣…ありがとうございます。必ず魔王を倒します。」

聖剣を受け取った刀哉はさらにやる気をたぎらせて いるようだ。

「それでは、皆様を転送させていただきます。どうか、私達の世界を救ってください。それと――良い旅を。ぜひこの世界を楽しんでください。」

そう言つてメルフィーナが微笑むと、ミュウ達の視界は徐々にこの空間に飛ばされたときと同じく、眩い光に包まれてゆき、その心地よい光の中に意識を手放していった。

神皇国、デラミス

深い眠りの底にあつた意識が浮上していく。

朦朧とした意識を頭を振つて払い目を開くと、そこは見知らぬ教会のような場所であつた。それもとびきり大きくて豪華な装飾がされたものだつた。

周りを見渡すと、教会の中には司祭のような服を着た少女と、それに付き従うように立つてゐる騎士がいた。また足元を見れば、教室から召喚されたときに輝いていた魔法陣と同じようなものが、役目を果たしたと言わんばかりに淡い燐光を放つていた。

ミュウが一気に意識を覚醒させ他の四人を見ると、ちょうど四人も目を覚ましたところだつた。

「いつつ…皆いるか？」

刀哉の問かけにそれぞれ軽く答える。と言つても、二度も意識を失つたあとであるので、少し頭がぼうつとしている者もいるようだが。

ミュウたちが起きたことに気がついたのか、司祭の中でも位の高さを思わせる風貌の銀髪の少女と、その隣に立つこちらも数多の戦いを乗り越えてきたかのような雰囲気を醸し出す騎士が近づいてきた。
「よくぞいらっしゃいました。異世界の勇者様方。ここは神皇国デラミス。転生神メルフィーナ様を崇拜するリンネ教団の聖地であるこの国のデラミス大聖堂の中でござります。」

そう言つてきたのは先程言つた高位の司祭のような少女だ。

「えつと…あなた方は？」

刀哉が聖剣を片手に立ち上がつて尋ねた。

他の四人も立ち上がり話す体勢になつた。

「申し遅れました。私はデラミスで転生神メルフィーナ様の巫女を務めさせていただいております、コレット・デミラミウスでございます。気軽にコレットとお呼びください。」

「私はデラミスの神聖騎士団団長のクリフ・ストロガフです。あなたの教育係につかせていただきます。どうぞお見知りおきを。」

先に挨拶したほうが銀髪の少女の方で、後者は横についていた騎士だ。騎士の方はなんだか美味しそうな名前をしている。

「神崎刀哉です。」

「志賀剎那です。」

「水丘奈々です。」

「黒宮雅。」

「南雲ミュウなの。」

それぞれも軽く自己紹介をする。

「さて、直ぐにでもこれからのお話をさせていただきたいのですが……その前に、まずは私達に勇者様方をもてなさせてください。」

こちらへ。と言つて刀哉達を先導して大聖堂をでる。

外に出た刀哉たちの目に入ってきた光景は、眩しい日差しの元に広がる、白を貴重とした、否、白一色の街並みであつた。まるでまだ誰にも踏み込まれていない新雪のように真っ白な建物達が並ぶその風景は、強い統一感と美しさを兼ね備えていた。

後ろを振り向くと、今しがた自分たちが出てきた聖堂は街の建物とは違ひ銀色に輝いており、その大きさも他の建物と比べて段違いに大きく、この国の象徴であろうことは容易に想像できた。

「この白い街並みは、デラミスの昔からの風習として、建物や道の類に魔法を強化する力を持つ素材を使っているのです。特にこのあたりはデラミスの中心ですから、その効力も強力なものですね。」

クリフは歩きながらそんなことも教えてくれた。

「じゃあ大聖堂が銀色のはなんですか？目立つからとか？」

「いえ、もつと大切な理由です。大聖堂の銀鉱石はその力を収束する特質を持ちます。ですから中心地に向かうにつれ、その効力も高まる仕組みになつている訳です。巫女が勇者様を召喚する際に重要な訳ですね。」

なるほど」と各々うなずくなりしていた。

少し歩くと、先程までいた大聖堂を囲うように建てられていた宮殿の入り口前についた。

『うわあ～！』

先程から見えていた宮殿だが、目の前にするとその大きさに5人は感嘆の声を上げた。西洋風のその建物は他の建物と同じく白を貴重として、存在感を放ちながらも囲つている大聖堂を引き立てるようになっていた。

「すでにご覧になられたと思いますが、これがデラミスの宮殿です。皆様には基本的にこちらを拠点としてもらいます。」

そう言つてから中へと先導していく。5人もそれについていった。中に入つて少し歩くと、コレットはある扉の前で立ち止まり、中へと全員を通した。

クリフだけは中へ入らず、扉の外で見張りを立てているようだ。入つた部屋はどうやら食堂のような部屋で、長机に椅子が並べられており、それなりに装飾もされているようだった。

全員がコレットに促されるままに席につくと、隣の部屋とつながつているであろう扉からメイドのような者たちが食事を配膳してきてくれた。

その食事も豪華で、よくある西洋の貴族の晚餐のようなものだった。

「勇者様方の召喚を記念して、ささやかながら食事をご用意させていただきました。どうぞお召し上がりください。マナーなどはお気になさらずにどうぞ。」

あまりの豪勢な料理にテーブルマナーなどを考えて萎縮していた4人（ミュウ除く）だつたが、コレットの言葉とに促されて気にしないことにした。ミュウは親からテーブルマナーを習つていたので気にしていなかつた。

『いただきます。』

声を揃えてそう言つてから、それぞれ食事に手を付け始めた。

「そういえば、どうして私達が召喚されるとわかつたのですか？コレットさんたちがあの聖堂で待つていたということは、今日召喚されるとわかつていたということですよね？」

食事に舌鼓を打つて一段落したころ、刹那がふと疑問に思つたことを尋ねた。

「そうですね。その理由は主に2つあります。その前に、敬語はやめてください。呼び方もコレットで構いません。皆さんもそうしてください。」

「で、でも」

「あなた方は勇者なのですから、たかが巫女などに敬語を使つていては示しがつかないでしよう？ メルフィーナ様の御使いでもあるのですから、こちらから敬意を払つて当然です。」

最後の一言が妙に迫真がかつていていた。というか”たかが巫女”と

言つても、巫女はこの国のナンバー2であつたりする。

「そ、そうか、たしかにその通りだな。それで、なんで俺たちが来るとわかつたんだ？」

「まず一つ目は魔王の発生の予兆が出始めていたことですね。」

「魔王の発生の予兆って何？」

雅がすかさず聞く。

「例えばダンジョンのモンスターが凶暴化してしたり、ボスが強化されていたりですね。まだその兆候も弱く、あまり変わりはないのですが。ダンジョンなどの説明は追々行つていきますね。」

「わかつたの。それで2つ目は？」

「こちらが主な理由となります。メルフィーナ様からの神託がありました。内容は魔王の再来と勇者の召喚についてで、日付などはその時にメルフィーナ様からお伺いしました。」

「なるほど。それでわかつてたと。納得。」

どうやら全員が納得の行く答えを得られたようだ。

「さて、それでは食事も取りましたし、少しだけこの世界のこと、今後のことについてお話しておきましょう。詳しいことは今後お教えしていくきますので、今は大切なところだけお伝えします。」

そう切り出したコレット曰く、

- ・この世界は、西大陸と東大陸の2つの大陸から形作られており、今いるデラミスは東大陸の大國である。

・東大陸は他に大国が3つある。

・魔王を倒すまで基本的に拠点はデラミスの宮殿を使って良い。

・今後の訓練は騎士たちと行ったり、ダンジョンへ行ったりする。

・この世界を学ぶため、座学も行う。

・魔王はどこにいるか、いつ生まれるか、誰か、全て不明。
とのことだった。

「そして今日はこのあと訓練所で皆様のステータスやメルフィーナ様から与えられた力の確認などを行います。なにか質問はござりますか？」

「はい。」手を上げたのは奈々だ。

「魔王が見つかってないってとても大変では？」
至極真っ当な質問であつた。

「そうですね。ですが、魔王はデラミスの総力を上げて捜索を行つております。また、メルフィーナ様からの神託によつて居場所がわかることもありますので、心配には及びません。」

この回答に奈々も理解を得たようだ。

「それでは訓練所へ移動しましようか。」

一同はコレットに連れられて訓練所へ向かつた。